

六一二十三 僑奢是れ第一の非なり (流布本五―二十二)

示に云く、がくにんのおの学人各々知るべし、人々ひと一の (大なる) 非あり。僑奢是れ第一の非なり。内外げの典籍じやくに同じく是れをいましむ。

外典げに云く、「貧しくしてへつらはざるは有れども、富みておごらざるは無し。」と云いて、なほとみを制しておごらざる事を思ふなり。この事大事なり。能々よくよく是れを思ふべし。

我が身下賤げせんにして人に (高貴の人に) おとらじと思ひ、人にすぐれんと思はば僑慢けいまんのはなはだしきものなり。是れはいましめやすし。仮令かりやう世間に財宝にゆたかに、福分もある人、眷屬いにようも圍繞し、人もゆるす、(それを是とし僑おごるゆへに) かはらの人のいやしきが、此れを見て卑下する (うらやみいたむべし)、このかたはらの人の卑下をつつしみて、自躰おん福力の人、いかやうにかすべき。 (人のいたみを自体富貴の人、いかやうにかつつしむべきや。かくの如き人は戒めがたく、その身も慎むことならざるなり。)

僑心けいしんなけれども、ありのままにふるまへば、傍らの賤せんしき (賤せんき人)、此れをいたむ。すべての大事なり。是れをよくつつしむを、僑奢けいしゃをつつしむと云ふなり。我が身富めれば、果報にまかせて、貧賤ひんけんの見みうらやむをばからざるを僑人けいじん (僑心) と云なり。

古人こじんの云く、「貧家ひんけの前を車に乗て過ぐる事なかれ。」と云へり。然れば、我が身車しん (朱車) にのるべくとも、貧人の前をば憚はばるべしと云へり。外典げに是かくのごとし、内典もまた是のごとし。

然るに、今の学人僧侶は、知恵法文 (智慧法門) をもて宝とす。是れを以ておごる事なかれ。我れよりおとれる人、先人傍輩ぼうはいの非義をそしり非するは、是れ僑奢けいしゃのはなはだしきなり。

古人こじんの云く、「智者ちやうの辺へにしてはまくるとも、愚人ふじんの辺へにしてかつべからず。」と。我が身よく知りたる事を、人のあしく知りたりとも、他の非を云ふはまた是れ我が非なり。法文 (法門) を云ふとも、先人 (先人先輩) の愚をそしらず、また愚癡ぐぢ、未発心 (愚痴矇昧もうまい) の人のうらやみ卑下しつべき所にては、能々是れを思ふべし。

(予も) 建仁寺に寓せしとき、人々多く法文 (法門) を問ひき。非も咎とがも (非義も過患かげんも) 有りしかども、この儀を深く存じて、ただありのままに法の徳をかたりて、他の非を云はず、無爲にてやみき。愚者の執しゆけん見深けんきは、我が先徳の非を云へば、嗔恚しんいをおこすなり。智恵ある人の真実なるは、法 (仏法) のまことの義をだにも心得れば、云はずとも、我が非及び我が先徳の非を思ひ知り、あらたむるなり。是のごとき事、能々思ひ知るべし。

【現代語訳】

教えていわれた。

仏道を学ぶ人はめいめい、次のようなことを心得ておくように。人は誰でも一つの欠点がある。おごり高ぶる心、これが第一の欠点である。仏教でも仏教以外の教えでも、同じようにこれをいましていてる。

儒教では、「貧しくてへつらわない人はいても、とんでおごらない人はいない。」という。やはり富める時の心をいまして、おごり高ぶらないように注意するのである。このことは大事なことであるから、よくよく考えなければならぬ。

自分はつまらないもの（いやしく暮らしも貧しい）であるのに、人に負けまいと思ひ、人よりすぐれようと思うなら、それははなはだしいおごりであるが、これはまだ気がついてやめることもできる。しかし、たとえば世間で財宝に恵まれ力を持っている人で、付き従う者が取り囲み、世の人達もこれを認めているような人がいると、近くににいる身分の低い人がこれを見て劣等感を起す。このように近くにいる人が劣等感を抱かないように用心するには、富も力もある人はどうしたらよいであろうか（どのよう^に気を配^つたらよいのか）。

自分はおごる心はなくても、ありのままに（勝手気ままに）ふるまうと、近くにいる（貧しい）人は心を傷つけられるであろう。これは何事につけ、だいたいなことである。こういうことをつつしむのを、おごりをつつしむ（おごりをおさえ、高ぶりを控える）というのである。自分が富んでいると、そのしあわせにまかせて、貧しく力のない人が見てうらやむのを、おごれる人というのである。（自分の富んでいることに無責任であり、貧しい人が見て、うらやんだりねたんだり、不平や不満を抱いたりする心情のあり方に、無神経だったり、これを無視するような粗野の心と、思い上がりの心というのである。）

古人も「貧しい家の前を車に乗って通ってはいけない。」と言っている。だから、自分は車に乗るのが当然でも、貧しい人の前では遠慮したほうがいいと言う。儒教でもこの通りで、仏教もまた同じである。

ところで、今、仏道を学ぶ人や僧侶は、智慧や教えを宝とするのであるが、それがすぐれているからといって、人に対してこれをおごるようなことはいけない。自分より劣っている人の誤りをいい、また先輩や同輩の間違いを言い立て非難するのは、おごりの心のはなはだしいものといわなければならぬ。

古人は、「智者の見る前で敗けるのはいいが、愚かな人の見る前で勝ってはいけない。」と言っている。

自分がよく知っていることを、人が間違つて理解していても、その間違いを言い立てるのは、それは自分の間違いとなる。教えについて言う時も、先人の愚かな点を悪く言わず、また愚かで未発心の人が聞いてうらやんだり、劣等感（ひがみやねたみや不満の気持ち）を抱きそうな所では、よく気をつけなければいけない。（よくよく考えて発言に注意し、十分に心を配らなければならぬ。）

私が建仁寺にいた時、人々がいろいろな教えについてたずねた。それには間違いも欠点もあったが、こういうことを深く考えて、ただありのままに仏法の徳を話して、相手の間違いは言わず、何事もなくすませた。自分の考えにかたくなに固執する人は、自分の先輩の間違いを言われると怒り出すものである。智慧がある真実の仏道者は、仏法の真実の意味が理解できれば、自分の間違いも先輩の間違ひもよくわかり改めるものである。このようなことをよくよく心得ておかないといけない。

◆人々々人は誰でも。人それぞれに。

◆憍奢々おごりたかぶる

◆外典げに云くく『論語』「学而篇」「外げ」は仏教以外の意。

◆憍慢々自らおごり人をあなどる。

◆福力々富と力。財力と権力。果報よく権勢のあること。

◆法文（法門）々仏法を説いた教え。

◆建仁寺に寓せしときく道元禪師二十八歳で帰国し、二、三年建仁寺に仮住まいしていた。

◆非く間違っていること。あやまり。道理にあわぬこと。

◆無爲々何事もなく。

◆愚者々仏心の未発の者。